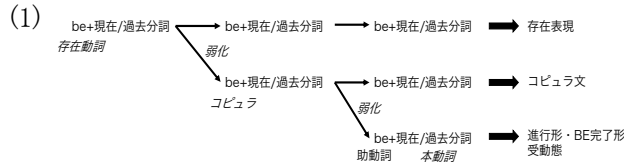


助動詞の文法化をめぐって 複雑系科学の視点から

保坂道雄

1. はじめに

英語の助動詞は、その歴史的過程の中で、本動詞から助動詞に文法化してきたことが知られている。たとえば、be 動詞の場合、(1)のような文法化の過程が想定されている。



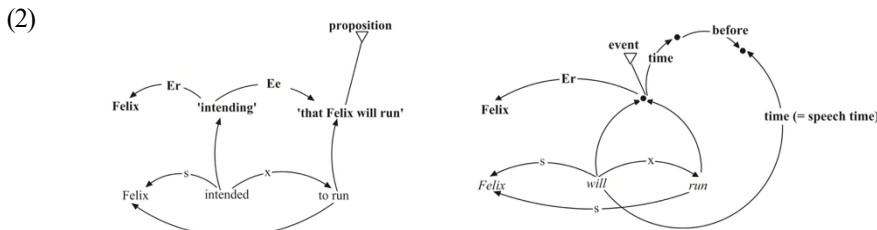
(保坂 (2024: 67))

しかしながら、こうした文法化についての理論的説明には、認知言語学的視点に立つ説明と生成言語学的視点に立つ説明が併存しており、現在も相容れない状況が続いている。本発表では、こうした説明方法はコインの裏と表の関係にあり、両アプローチの融合が必要であることを議論する。

2. 助動詞の構文変化と構造変化

2.1 構文文法に基づく説明

構文文法による数少ない助動詞研究の中から Gisborne (2011)による will の考察を概観する。彼は、Hudson (1984)の Word Grammar に準拠し、(2)に示すように、will の未来時標識として用法は、2つの異なる統語的要素が意味的に単一の事象と関係づけた新たな構文の発達の場合であるとする。



(Gisborne (2011: 171-2))

古英語の willan は intend の意味を持っていたとの前提で、(2)に示すように、古英語では、本動詞として意図を意味する event と補部の不定詞を中心とする event の2つの事象が存在していたとする。それに対して、現代英語では、will が助動詞となり、単一の event をあらわし、加えて、話者の視点に立つ時間枠が主観的意味を生んだとする。なお、古英語の willan は意志の用法と単純未来を表す用法との間に曖昧さがあり、こうした曖昧性を起点に変化が生じたとする。

2.2 生成文法に基づく説明

次に生成文法に基づく説明の例として、Roberts and Roussou (2003)を概観する。彼らは文法化を再分析により新たな機能的要素が誕生する通時的現象と捉え、(3)に示すような変化を想定する。つまり、(3a)の古英語では、magan は本動詞として VP 内に基底生成され、その後 TP の主要部に移動するが、(3b)の現代英語の may は、TP の主要部に基底生成されるように再分析された結果であると説明する。

(3) a. [TP Sone [TP hit mæi [VP t_{mæi} [TP T [VP ilimpen]]]]]

b. [TP Soon [TP it may [VP happen]]]

(Roberts and Roussou (2003: 40-1))

なお、(3a)の古英語の場合は2つの構造であり、(3b)の現代英語の場合は1つの構造となっている点は、Gisborneの説明とも共通する。

また、van Gelderen は、(4)の Modal Cycles を想定し、Late Merge Principle に基づき、(5)に示すような will が順次上位の機能範疇の主要部に基底生成される変化を提案している。

(4) V > deontic > epistemic > future = grammaticalization

(van Gelderen (2024: 74))

(5) [TP Will [MepistemicP <will> [v*P DP [v* <will> [VP <will> gedon]]]]]

(based on van Gelderen (2022: 113))

2.3 両説明の妥当性の検証

本節では、これまで発表者が研究を続けてきた(6)で示す英語の多様な(助)動詞連鎖構造の語順変化に基づき、両説明の妥当性を検証した。

- (6) OE ME / ModE
 PrP/PP-be/have-Modal (10.6%)
 Modal-PrP/PP-be/have (9.8%) ➡ Modal-be/have-PrP/PP (100%)
 Modal-be/have-PrP/PP (78.3%) (Hosaka (2022), 保坂 (to appear))

その結果、構文文法に基づく説明では、派生構造が想定されていないため古英語の3つの語順を別々の構文として説明することが必要となるが、意味的に大きな差がないため異なる構文を仮定する妥当性が低いと思われる。また、中英語以降に1つの語順に収束した点も説明が困難と思われる。次に、生成文法に基づく説明では、(7)の Uniformitarianism が前提になっており、助動詞連鎖構造では(8)に示すような多様な機能投射構造をすべての言語に想定する必要が生じ、言語進化的妥当性の面からも再考が必要である。

(25) All languages at all times reflect the same basic UG. (Roberts (2021: 274))

(26) a. John must have been being beaten.

b. [TP John [T must [VP have [PartP en [VP be [ProgP ing [VP be [VoiceP EA [Voice Voice [PartP en [VP beat (John)]...]]]]]]]] (Roberts (2019: 373))

3. 助動詞構造の創発：複雑系科学の視点から

3.1 Emergence

英語の通時的過程の中で本動詞が助動詞として文法化したことは明白であるが、現時点では、認知言語学及び生成文法の立場から、なぜ助動詞化したかを明示的に説明することは困難と思われる。しかしながら、両研究ともに構文や構造が「創発(emergence)」するという議論がしばしば見られる(Golderg (1999), Roberts (2019), Biberauer (2018)など)。この「創発」という概念は元来複雑系科学に根ざすもので(谷口(2024))、認知言語学者である Bybee(2015)や生成言語学者である Lightfoot(2020)もまたは、言語を複雑適応系と見なせる可能性を指摘する。こうした見解が正しいとすると、助動詞の文法化を創発現象として説明することも可能となる。

3.2 Dynamic Model of Language

本発表では、複雑系科学の知見、及び人間のことばを「思考の言語」と「伝達の言語」という2つの側面から捉える Dynamic Model of Language (Hosaka (2016)) に基づき、Chomsky が示唆するように最初に生物進化として Merge の能力が発現し、意味素性を併合し「思考の言語」を作りあげ、それがすべての人間が共有する普遍的言語能力となったと考える。それに対して、「伝達の言語」では、「思考の言語」の中核をなす Computational Efficiency に対し、伝達のインターフェイスから要請される Communicative Efficiency との相克が生じ、一種の「カオス状態」が生まれることになり、その結果複雑適応的变化が生じ、「秩序」が生まれると考えられる。それこそ言語規則の誕生であり、その中核の一つが助動詞を含む機能投射構造(FP)の創発である。

3.3 助動詞連鎖構造の語順変化

上述の DML に基づき、英語の(助)動詞連鎖構造の語順変化を説明すると、古英語では、FP がない構造と FP が1つある構造及び PF が2つある構造が想定される。更に、こうした FP は「思考の言語」と「伝達の言語」の間で生じる相克から創発した構造であると考えることにより、普遍文法に過度に複雑な構造を仮定せずに済み、かつ言語使用もまた新たな言語構造を生み出す役割を有すると説明できる。こうして、生成文法の主張する言語の普遍性と認知言語学が探究する言語の多様性を共に説明することが可能となるわけである。

参考文献 Biberauer, T. (2018) "Pro-drop and emergent parameter hierarchies," *Null Subjects in Generative Grammar*, OUP, 94-135/ Bybee, J. (2015) *Language Change*, CUP/ Gelderen, Elly van (2022) *Third Factors in Language Variation and Change*, CUP/ — (2024) *The Linguistic Cycle*, Routledge/ Gisborne, N. (2011) "Constructions, Word Grammar, and grammaticalization," *Cognitive Linguistics* 22.1, 155-182/ Golderg, A. E. (1999) "The Emergence of the Semantics of Argument Structure Constructions," *The Emergence of Language*, B., Lawrence Erlbaum Associates, 197-212/ Hosaka, M. (2016) "Two aspects of syntactic evolution," *Advances in Biolinguistics*, Routledge, 198-213/ Hosaka, M. (2022) "On the derivation of the three-verb clusters in Old English," *Proceedings of the Linguistic Society of America*, Vol. 7, <https://doi.org/10.3765/plsa.v7i1.5215/> 保坂道雄 (2024) 「BE 動詞に刻まれた言語進化の痕跡」, 『英語語法文法研究』第31号, 56-71/ 保坂道雄 (to appear) 「(助)動詞連鎖構造の語順変化について」, 『近代英語協会研究叢書第2巻』, 開拓社./ Lightfoot, D. W. (2020) *Born to Parse*, MIT Press/ Roberts, I. (2019) *Parameter Hierarchies and Universal Grammar*, OUP/ — (2021) *Diachronic Syntax* 2nd Edition, OUP./ Roberts, I. and Roussou, A. (2003) *Syntactic Change*, CUP/ 谷口忠大 (2024) 『記号創発システム論』, 新曜社。